国際交流2018「研究者・翻訳家たちの万国旗」

日時　2018年10月13日（土）午後2時～5時30分

場所　グリーンホール

創立時より詩文学の国際性に大きな重点を置いてきた日本詩人クラブはもうすぐ七〇周年。その前夜祭のような盛りだくさんのプログラム内容で原点を深め、未来を見据えるつどいとなった。「万国旗」と言っても政治経済的に国境で隔てられて特定システムに組み込まれた旗という意味ではない。人類個々の心の深いところでつながり交流する詩文学の万国旗である。それは日本詩人クラブ規約第二章第三条「本会は、和暢友愛の精神をもって詩及び詩学の興隆、国語の醇化に努め、日本文化の進歩に寄与するとともに、詩の国際的交流を促して、世界平和の確立に貢献することを目的とする。」という原点に基づいている。その最前線で地道に活躍する研究者・翻訳家の会員にスポットライトを当てるのが今回の趣旨だ。同時に全国各地に住む個々の会員・会友の個々の国際的詩文学活動にもスポットライトを当てる事前アンケートを実施・披露した。

来場者に感謝を伝え、日本詩人クラブの国際交流重視を強調した長尾雅樹理事長「開会の言葉」で講演会が始まった。

司会は渡ひろこ氏と江口節氏。おふたりによる柔らかく聴きやすい進行であった。ここからは九名の出演者が次々と登壇し、お話と朗読で地球の詩文学を案内した。

始まりは京都から駆けつけた薬師川虹一氏「リトアニア出身オーストラリア在住リジア・シュムクーテの詩」。詩における言霊の大切さを語りながら、ではバルト三国のリトアニアと英語圏のオーストラリアの二つをルーツに持つリジアさんの詩世界の言霊はどうなのか。氏の問いかけが続いているという。関西詩人協会を通じての交流がきっかけで始まった翻訳出版も三冊目を迎えた。短い詩作品の中に不思議に交差する一語の喜びがあると氏が評する二篇「白い虹が」「交差する言葉が」の日本語訳と英語原詩の朗読が響いた。特に前者は英語の虹が複数になっているところなどに謎めいた奥行きが強調され、冒頭から会場全体が深い詩世界に入って行った。

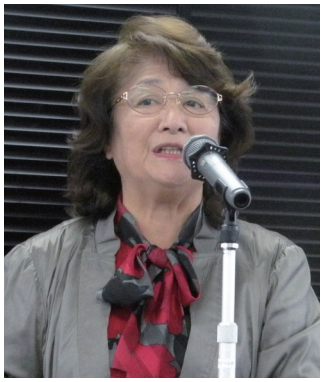
続いてインド関係二名の登壇。まず谷口ちかえ氏が日本詩人クラブとインド詩人たちとの交流を振り返った。実感されたのはインドがいかに文化外交を重視しているか、文化・文学を大切にする風土かということだった。たとえば移転した在日インド大使館の一階は文化センターになっている。日本が国際交流する時に、もちろん欧米からも学ぶことは大切だが、他からの視点がさらに重要ではないかと強調。インドとの詩交流関係で谷口氏が交わした電子メールは膨大な件数になっているという。

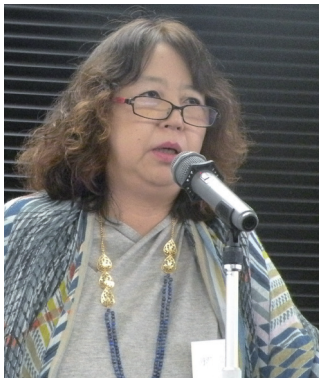
次に丹羽京子氏が登壇し、ベンガル語の詩人ションコ・ゴーシュの詩世界と人物背景を案内した。ベンガルではチョラという伝統的な戯れ歌世界があり、この詩人の詩にもそのメタファーが使われている。一九五一年の食糧不足に抗議するデモで銃撃死した一六歳の少女をテーマにした力作詩「ジョムナボティ」の日本語訳とベンガル語の朗読は圧巻だった。配布資料に印字された摩訶不思議な文字体のベンガル語に参加者の目は釘付けになり、神話や民話を政治的な主題に重層的に織り交ぜた詩の豊かな韻律に耳を澄ませた。一九三二年生まれで存命のこの詩人に注目だ。

細野豊氏は「ラテンアメリカの日系詩人ホセ・ワタナベとペドロ・シモセ」。この二人のスペイン語詩人の共通点は、父親が日本からの移民で母親が現地人であること、常に軍事独裁政権に反対してきたこと、キューバの文学賞「アメリカ大陸の家」賞を受賞していること、である。日本では「移民は棄民」という見方が根強いが、日系移民一世の苦難を真に受けとめるこの二人の詩作品に学ぶべきだろう。ボリビアからスペインに亡命したペ

「研究者・翻訳家たちの万国旗」
お話と詩の朗読

薬師川虹一氏


谷口ちかえ氏

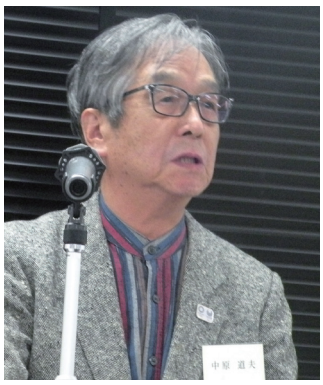

丹羽京子氏

細野豊氏

冨岡悦子氏

神品芳夫氏

佐川亜紀氏


中原道夫氏

清水茂氏

ドロ・シモセの詩から「わが父の伝記」、ペルーのホセ・ワタナベの詩から「手」を、日本語訳とスペイン語で氏が朗読。共にそれぞれの詩風で日本からの移民であった父のことを切々とうたう詩世界に、会場全体がしんみりと感銘に包まれた。

ドイツ語関係は二名。冨岡悦子氏は「パウル・ツェランの詩」の根源にあるものについて明晰に語った。ポイントはツェランがウクライナ、当時のルーマニアに生まれたユダヤ人であったことをめぐる激動の運命。旧ソ連、ナチスドイツに翻弄されながら、ドイツ・ロマン派とリルケに親しみ、ブカレスト、ウィーン、パリと転々とし、いくつもの言語を習得して必死に生きる中で詩が書かれた。冨岡氏はそんなツェランの果敢に詩的営為を深めながら歴史的運命を引き受ける詩世界にひきつけられ研究してきた。日本語訳とドイツ語原詩で朗読した「帰郷」のメタファーの解説もわかりやすかった。

続いて神品芳夫氏が登壇し、「ヨハネス・ボブロフスキーの詩」を関連づけた。やはりドイツ、旧ソ連に支配されながら、琥珀の産地として有名なバルト海の地が舞台となり、リトアニア文化に親しんだ東ドイツの詩人ボブロフスキー。彼は民族間の相互理解と平和に向けて、豊かな交流の歴史をもつ古代のサルマチア平原を詩にうたった。その作品「サルマチア平原」後半部からの日本語訳とドイツ語原詩の朗読に、人類の見果てぬ夢と遺産が伝わってきた。人称変化動詞を用いない独特のレトリックは、造形空間に言葉のイメージを布置した手法で、都市もまだできていない時代の原風景を思わせるという氏の解説が新鮮に響いた。

韓国関係も二名。佐川亜紀氏「金時鐘の詩」では、日本の植民地時代に韓国済州島で育った詩人が、戦後の解放独立で詩の価値観が激変する衝撃を受け、済州島事件の弾圧後、大阪の旧・猪飼野（現在の鶴橋周辺）に逃れて在日コリアンとして詩を書いてきた歴史ダイジェストが聴けた。小野十三郎との詩的出会いの影響も強調され、初期の名作詩集『新潟』『猪飼野詩集』などを始め、戦後日本についてかなりきついことにも対峙してきた詩人の姿が浮き彫りになった。刊行されたばかりの『金時鐘コレクション』シリーズから第一詩集『地平線』収録の詩「自序」の朗読があり、強烈な内的メッセージが響き渡った。

続いて、日韓の詩人交流を積極的にすすめてきた中原道夫氏が、韓国ではユン・ドンヂュよりも有名かもしれないという大邱の詩人イ・サンファ（李相和）の詩から、「天にさからう」後半部分と「うばわれた野に春はくるのか」の日本語訳を朗読し、紹介した。支配層である両班出身でありながら、三一独立運動に加わって弾圧され、来日後は東京のアテネフランセで学びフランス行きを計画しながら、関東大震災での苦難に遭い帰国した。多難な人生であったが、現在、韓国の教科書に詩が載っているという。

講演のトリは清水茂氏の「イヴ・ボヌフォワの詩」。このフランス詩人との詩的交流やボヌフォワの詩世界についてのお話は、日本詩人クラブ関係のさまざまな場で清水氏によって語られてきた。今回はそのボヌフォワの作風の大きな曲がり角となった一九七五年の詩集『入り口の罠のなかで』にしぼってのお話だ。その詩集は詩人にとってそれまでの集大成であり、出発点でもあった。若い頃のシュールレアリスムの詩では、触れている現象がそのままに受け取れるのではなくその奥の層に真実のものがあるというものであった。言葉を書くことが自分に閉じていってはいけないという意識が働いていき、やがて、私ではなく私たち、斬新な言葉を積み重ねるだけではなく自然や宇宙そのものを自分が受け入れていく、という境地の詩となった。日本語訳とフランス語原詩で「散らばったもの、

分割し得ぬもの」よりの朗読が豊かに響いた。

以上九名の密度濃く充実したお話と朗読それぞれに、その都度コメンテーターとしての川中子義勝会長がその特長をとらえた短評をマイクで伝え、九名各自がこれまで重ねてきた研究の紹介にも丁寧に触れて紹介した。会長自らが国際的研究者であることもあり、この演出に会場は詩的親しみの空気となった。九名の出演による詩的な内容を深いところでつなぐものも会長から提示されて連関が印象づけられた。

国際交流担当理事の佐相憲一より、事前に日本詩人クラブ会員・会友に実施した「国際文学活動アンケート」の結果が報告された。配布物としての三四名分の記述回答集に注目が集まり、入会間もない会員から大ベテランまで熱心に報告された詩活動の国際性を日本詩人クラブ全体で受けとめて財産にする試みだ。こうした参加型の実験が、もうじき七〇周年を迎える日本詩人クラブのさらなる発展につながることを期待したい。

熱気にあふれた講演会の最後は、元会長・中村不二夫氏「閉会の言葉」。アイデア溢れるすばらしい会だった、さまざまな言語で原詩を研究者・翻訳家が自ら朗読するのが新鮮だったと強調。先達によって日本詩人クラブの規約に盛り込まれた国際平和の視点がいまも生きていると感じたとの指摘。出演者と関係者へのねぎらいが述べられて、大きな拍手のもとに会は終了した。

懇親会では、日本現代詩人会国際交流担当理事の鈴木豊志夫氏より来賓あいさつをいただき、前会長の武子和幸氏の乾杯の音頭で和やかに会食・交流が始まった。その後、多くの参加者から生き生きとしたスピーチをいただき、楽しい雰囲気のまま懇親会も終了した。多方面で行事が多いこの季節、お忙しいところを来場参加されたおひとりおひとりに、また事前アンケートに参加されたおひとりおひとりに、心より深く感謝御礼申し上げる。

（担当理事　佐相憲一）

司会　江口節氏

司会　渡ひろこ氏

長尾雅樹理事長

川中子義勝会長

佐相憲一理事

中村不二夫元会長